
ドラゴンクエストV 天空のスライム？

ロクロク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエストV 天空のスライム？

【Nコード】

N9575W

【作者名】

ロクロク

【あらすじ】

カボチ村の村人に頼まれ、リョカは西のある洞窟のモンスターを狩りに行った。

そこで出会ったのはかつての仲間と奇妙なスライムだった。

この小説は作者がもう一つの小説に行き詰まったときに投稿する、不定期更新の小説です。

しかも作者はまだ書き始めてから日が浅いです……………なので出来ればアドバイスを下さると嬉しいです……………

この小説は綺麗に完結した本編が地味に崩壊する予定です。

特に特定のキャラの性格が少し悪くなる可能性があります・・・

・

ドラクエ5を汚されたくないという方は絶対に見ないでください！

！！

・・・どんな結末でも大丈夫b という方のみ先にお進みください・・・

01（前書き）

私の他の小説を読んでもくださっている方、
ごめんなさい！！！！

s i d e リュカ

「ここに村を襲っている魔物がいるのかな……………」

僕はカボチ村の人達に頼まれて、

西の方から来る頭に青いものを乗せたトラのようなモンスターを倒しに来た。

どうやらそのモンスターは週に数回、

夜に現れ、村で育てている食べ物を奪っているらしい。

それだけならまだ分かるんだけど、

そのモンスターは村の人を襲ったことが無いらしい。

……………生活のために村の食べ物を食べているだけかもしれないけど、

村の人たちも困っているんだ。

それに不意だけとお金も貰ってるんだから、

僕はそのモンスターを倒さなきゃいけない…………

真っ暗な洞ぐつの中、僕の馬…………パトリシアが馬車を引いて洞ぐつ内を移動していた。

僕の隣には少しだけ錆びた剣…………銅の剣を装備した、スライムナイトのピエールが

周りを警戒していた。

彼はラインハットに向かう途中に出会った魔物だ。

初めこそはお互いに剣を向け、戦ったが、

その戦いの中で彼は僕のことを気に入ってくれたらしく、
僕の仲間になってくれた。

そんなピエールの後ろを飛んでいるのが、ホイミスライムのホイミンだ。

ホイミンは確かラーの鏡を手に入れる途中に出会った気がするがあまり覚えていない。

気が付いたら仲間になっていた。という感じだ。

僕たちはこの三人パーティーで行動している。

僕とピエールが全線で戦い、ホイミンが補助、という感じに。

先程も現れたさまようような相手に僕とピエールのコンビネーションで倒した所だ。

「リュカ殿。本当にここに村を襲っている魔物がいるのでしょうか？」

ピエールが僕に質問してきた。

ピエールは魔物でありながら人の言葉を話せる賢い魔物なのだ。

「村の人からの話じゃ、ここにいるのは確かなはずだよ?」

僕がそう言つと、ピエールはそうですかと納得してくれて、前に進んで行った。

僕も馬車を引きながら、ピエールが先に行つて確認してくれた道を進んでいった。

洞ぐつの中はかなり深い所まできたと実感できる所まで行くと、
どうやら、魔物の巣らしき洞穴があった。

僕とピエールはゆっくりとその洞穴をくぐった。

「ガルルルルー!!」

洞穴の中心にいたトラの魔物……キラパンサーが雄たけびを上げてきた。

まさか村を襲っていた魔物がキラパンサーだったなんて……

……キラパンサーは地獄の番犬と呼ばれるほど凶悪な魔物のはずだ。

それなのに今まで村に被害者が出てないなんて……

「リユカ殿!!!」

ピエールの声に反応して顔を上げてみると、そこにはこちらに向かって飛びかかる
キラパンサーの姿が目に入った。

「くっ!!」

僕は腰に差していた銅の剣を抜くと、それをキラパンサーに向けて横に薙ぎ払った。

だがキラパンサーはそれを爪ではじくと、その勢いを利用して後ろに飛んだ。

僕はキラパンサーの強さに驚いたが、それ以上にキラパンサーの後ろの岩に刺さっていた剣を見て驚いた。

あれは父さんの剣……！！
どうしてこんなところに……！！ まさか……？

「リュカ殿……！！」

僕はピエールの叫び声を聞き、不意に横にジャンプした。

先程までいた場所をキラパンサーは横切ってきた。

「リュカ殿！ 戦闘中に考え事はしないでください！」

「……ピエール。今からこの戦いに手を出さないでくれないか？」

ピエールは僕の言葉に疑問を持って質問してこようとしたが、僕の真剣な目を見ると、ゆっくりと剣を鞘にしまい、洞穴の外へと向かった。

「……ボロンゴ……！ 僕だ！ リュカだよ！」

そう言うときラーパンサーは一瞬動きを止めた。
やっぱりあのラーパンサーはボロンゴなんだ！

キラーパンサーは警戒するようにこちらを見つめていた。

……あと一步で何かを思い出してくれそうだ……何かないか！
ボロンゴとの思い出の品は……

僕はバッグの中身を必死に探した。

そしてあるものを見つけた。

「……ボロンゴ。これを覚えていないか？」

僕はそう言いながらゆっくりとリボンをかざした。

これは昔、友達がボロンゴにとってプレゼントしてくれたリボンだ。

キラーパンサーはゆっくりと近づくとリボンのにおいをかぎ始めた。
そして急に驚いたような表情をした。

なにか思い出したようだ！

キラーパンサーが殺気をなくしてゆっくりと近づいてきて、僕の前
まで来ると、

急に顔を舐めはじめた！

やっぱりボロンゴだったんだね！

「フニアー」

ボロンゴは先ほどまでの威嚇するような声じゃなく、甘えるような声でそう言ってきた。

そしてしばらく僕が頭を撫でていると、急に父の剣らしきものの方へ歩いていき、それを大事そうに持ってきた。

……この紋章はやっぱり父のものだ！！

僕はそれを受け取ると銅の剣を袋にしまい、父の剣を腰に差した。

「フニアー。ゴロゴロゴロ……」

ボロンゴはそう声を出すと僕の足元まで戻ってきた。どうやら付いてきてくれるようだ。

僕は洞穴から出て、外にいるピエールたちと合流した。

洞窟の出口付近まで来たあと、急に横を歩いていたボロンゴが動きを止めた。

「どうしたの？ ボロンゴ？」

僕達はボロンゴが見つめている先を見つめた。

そこには全身が青色の小さな魔物……スライムが僕たちを見下ろしていた。

「ガルル！！」

ボロンゴがスライムに向かって吠えた。

その声は先ほどのように敵意を含む声ではなかった。

「……そうか。主人と出会えたか」

僕たちは突然の出来事に驚いた！ スライムが人間の言葉を話したのだ！

話せる魔物は少なくはないがこの世界に存在する……

現にピエールは人間の言葉を話すことが出来る。

それなのになぜ驚いたかというと、

スライムの声があまりにクールな声だったからだ。

見た目のギャップ差のせいで必要以上に驚いてしまった。

僕がそうやって思考の世界に入っていると再びボロンゴが吠えた。

「……一緒に行くのだと？」

……お前、知ってるだろ？ 俺が人間が嫌いなことを……」

スライムの言葉からしてどうやらボロンゴはスライムを仲間に誘ったようだ。

……勝手に仲間を増やされるのは困るけど、彼はボロンゴの友達みたいだし、話せる魔物がピエールだけじゃ寂しいのも事実だから、僕も彼を勧誘するのに手を貸した。

「こんにちは！ 僕はリュカ。ボロンゴの友達さ！……君は？」

「……俺は見ての通りスライムだ。……名前はない……」

スライムはさっきボロンゴと話していた時とは違い、敵意を含めた鋭い瞳で僕を睨んでいた。

……さっきは下から見下ろされてたから分からなかったけど、このスライムはかなり目つきが鋭い。

僕はスライムの敵意に押されながらも、質問をした。

「……君はボロンゴとはどういう関係なの？ 友達？」

「……こいつとはそんな関係ではない。十年ぐらい前にこいつが魔物も狩れずに一人弱って倒れているところを助けて、戦い方を教えたただけだ。」

「……まあその剣を守るように戦っていたから、狩れないのも無理はないがな」

「……どうやらボロンゴを助けえくれてたみたいだ。」

ボロンゴが父さんの剣をそこまで大切に扱ってくれてたなんて……

「……ボロンゴを助けてくれてありがとう」

「……勘違いするなよ？」

俺はこいつが魔物の癖に別の魔物に襲われている子供を助けたのを見て、

こいつに興味を持ったからこいつと一緒にいただけだ」

スライムはそう言いながら視線を後ろのピエールたちに向けた。

その様子はまるで何ぜお前らが人間というんだという意味を持った目だった。

「……お前らはどうして人間なんかと一緒にいるんだ？」

「私はアベル殿と直接剣を交えることでアベル殿が悪い人間でないことが分かった！」

だから私はリュカ殿に付いていく決心をつけたのだ！」

「……つまり自分より強いそいつが いい奴だったから付いて行ってるってことか？」

「左様……！」

スライムは大きく息を吸い込み、大きなため息を付いた。

「……お前は言葉が足りなくて分かりづらい。
それでお前もこいつと同じ理由か？」

スライムの質問に対してホイミンは答えずにただゆらゆらとしていた。

……ホイミンてまさかあれで会話してるのかな……いやそんなはずはない！
そんなはずは……

「……へえ……お前の理由はまともだな」

スライムが感心したようにそう言った。
嘘！？ 本当にあれで会話してるの！？

僕が驚いているのをスライムは無視して今度は僕のバックを見つめ

た。

するとスライムの額がピクリとなったのに僕は気付いた。

「……おい！」

スライムが僕に質問してきた。

だがその様子は先ほどまでとは違い、何かを見さざめている様子だった。

「……お前は どうして旅をしている？」

なぜか僕は本当のことを言わなくてはならない気がした。

……まあ、もともと質問されたら誰にでも答えるつもりだったけど

……

「……僕は魔界に連れて行かれた母を助けるため、

魔界に行くため……魔界の魔王を倒すため伝説の勇者を探してる

！」

「……人間が魔王に勝てるとでも思っているのか？

もちろん伝説の勇者も所詮は人間……

そんな人間が魔王に挑むだと？」

「……確かに魔王は強大だ。……人間の力じゃ敵わないかもしれないな

い……

でも、僕は止まるわけにはいかないんだ！

……父の遺志を無駄にするわけにはいかないんだ……」

僕が一気にそう言うと、スライムは眼を閉じて何かを考え始めた。そしてゆっくりと目を開けると少しだけ口元を緩ませて言った。

「……人間が魔王に勝てるかどうか、それを見届けるのも悪くはない。」

……いいだろう、お前に付いて行こう。……だが、おれは戦わないからな？

だから邪魔になったらいつでもメンバーから外すといい……」

スライムがそう言うのと僕を見つめてきた。

その瞳はどうするんだ？と僕に尋ねている気がした。

「……分かった。よろしくね？ ええつと……スラお……！」

「……変な呼び名はやめて欲しいんだが……」

こうして僕たちのパーティーにスラお（非戦闘メンバー）が仲間になった。

02（前書き）

この前言うのを忘れていましたが、
リュカの袋はゲームと同じ、何でも入る袋です！

この小説は詰まった時に書こうと思ってましたが、
もう一つの小説とできるだけ代わりばんこに書いたほうが、
どっちもはかどるかな？
と、思い始めました・・・

sideスラお

……俺は今、

カボチ村の前で止まっているパトリシアの馬車の中でアイツらを待っていた。

どうやらアイツはこの村の人間にボロンゴを狩るように依頼されていたみたいだ。

だがアイツはそのキラーパンサーを連れて村に入っていた。

……恐らくキラーパンサーとグルだったと思われるのが関の山だろう……

まあ、たとえボロンゴを村に連れて行かなくても、そのことは先程目撃されていたようだから、連れて行くに関してはどちらでも良かったが……

……お！ どうやら帰ってきたようだな……

sideout

S i d e リュカ

「金はどうなったんだ？」

僕が村から出て馬車に近づくとスラおが顔をだして尋ねてきた。

「……何か言う前にお金を渡されて、
さっさと出て行けって言われたよ……」

村の人の殆どはボロンゴを怖がった顔で見たり、僕を憎むような目
をしていた……
……確かにボロンゴが村を襲っていたのは事実だけど、
あんな態度は……

「……村人の態度が気に入らないって顔をしてるぞ？」

スラおが僕の心を見透かすようにそう言ってきた。

「村人がお前にとった態度は当然の行為だ。
お前は村を襲った魔物を倒すように依頼されていた。
……それなのにその魔物を連れ、さらに仲良く歩いている光景を
見られたんだ。

当然の反応だろうが……」

……確かにスラおの言うとおりだ……

村の人にとってボロンゴは恐怖の対象なんだ……

それと仲良く歩いているのをみられたら誰でもそうつ反応をするよね……

「……それでこれからはどうするんだ？」

スラおが話を変えるようにそう言ってきた。

……気を使ってくれてるのかな？

「次はとりあえず新しい村か、町に行つて、情報を集めようと思つてるんだ」

「……で、その目的地は？」

うつ！ 痛いところを付く……

何時も次の目的地は新しい村か町で場所を調べて、向かっていたんだ。

……でも今回は情報を教えてくれそうな雰囲気じゃなかったからな……

僕がそうやって考え込んでいると、スラおは大きくため息を吐いて言った。

「……ポートセルミの西にルラフェンといった、少し大きめの町がある……」

次に情報を集めるならそこが適任だろう……」

「そういう事はリュカ殿が決めるのだ！ そなたが決めることではない……！」

スラおの言葉にピエールがそう言った。

……僕を立ててくれるのはうれしいけど、それよりもっと仲良くしてほしいな……」

「なら次はそのルラフェンに向かおう！
ピエールもそれでいい？」

「……リュカ殿が決めたのなら私はどこへでも……」

「なら決まりだね。それとピエールはスラおと仲良くなること！
スラおは町のことを教えてくれてありがとう！」

「……戦わない代わりに情報を提供しただけだ。
まあ特価交換みたいなものだから気にするな」

スラおはそう言うと、馬車の中へと戻っていった。

……スラおは戦いが苦手なのかな？

「よし。ルラフェンに出発だ！！」

僕はそう言ってパトリシアの前に立ち、歩き始めた……

「……ここがルラフェンか……」

スラおの言う通り、ポートセルミの西に大きな町があった。

「……確かに大きな町ですね……」

少しだけ怒った声でピエールはそう言った。

……さっきの事、まだ怒ってるのかな？

ここに来る途中に魔物が襲ってきて、僕たちを囲んだとき、スラおは全く気にせずに馬車の中に居たことを……

「……スラおは初めから戦わないって言ってたじゃないか……。それにボロンゴが加わったことで、前衛が増えて、戦いやすくなったんだから、ちょうどいいんじゃない？」

戦闘はボロンゴのおかげでかなり戦いやすくなった。

僕とピエールとボロンゴが接近で戦って、傷を負ったら後ろにいるホイミンが回復。

……うん！ いいコンビネーションだ！

「とりあえずスラおはさっきのようにパトリシアと町の外で留守番だから、

僕たち四人で町を詮索しよう！」

僕がそう言つと、ピエールたちは頷いてくれた。
よし！ 絶対に情報を手に入れるぞ！！！！

「……ここはどこなんだ！？」

「……リュカ殿。こっちはさっき、通りましたよ……」

あれから僕は迷ってしまった。町の中で……

「こっちは？」

「……こっちもさっき通りましたよ……」

……この町はとても迷いやすい……！

こんなに迷うのは僕せいじゃない！ 町のせいだ……！

……僕はあれから数十分かけてほぼ町の全てを回った。

……後は……

「……ここが呪文を研究しているおじいさんの家かな？」

「おそらくそうでしょう。家から変な色の煙が噴き出てきますし」

……僕がこの町を探索して知ったことの一つに、
変な呪文を研究しているおじいさんがいるという事がある。

僕はその呪文に興味を持ち、そのおじさんに会いに来たのだ。

コンコン！

……反応が無い

コンコン！！

……反応が無い

コンコン！！！！

……反応が無い

「あれ？ 留守なのかな……」

僕がそう言いながらドアノブを回した。

ガチャ！

「あれ？ 鍵がしまつてないぞ？」

僕はそのままドアを開けた。

……その先に目に入っ たのは大きなツボと、そこから吹き出す不思議

議な煙だった。

……そしてそのツボの近くに本を持ちながら
ツボを見たり本を見たりとを来る返しているおじいさんだった。

僕はおじいさんをボーッと見ていると、僕気が付いたのか、
おじいさんが僕の元に歩いてきて言った。

「なんじゃ お前さんは？」

お前さんも煙たいとか文句を言いに来たのか？」

僕はその質問にすぐ首を振った。

「すると わしの研究を見学に来たわけだな。
なかなか感心な奴だ」

おじいさんはうんうんと頭を下げながらそう言うてきた。

「もし 研究が成功すれば
古い呪文がひとつ復活することになるじゃろう」

「古い呪文ですか？」

「うむ。それは知っている場所であれば
瞬く間に移動できるというたいそうな呪文じゃ！」

「それはすごい呪文ですね!!」

僕がそうやって褒めるとおじいさんはうれしくなったのか僕に提案をしてきた。

「どうじゃ？」

この研究を手伝ってみたいと思わぬか？」

「いいんですか!？」

「構わぬ構わぬ! よし!

それではわしについてまいれ!」

「はい!!!!」

僕はそう返事をし、走って階段を駆け上るおじいさんの後を追いかけた。

二階に上がると、おじいさんは机の方に向かい、そこに広げてある地図を見て言った。

「ちょっとこの地図を見てくれ」

僕はおじいさんの言う通り、地図をみた。

「今、わしらがいるこの町がここじゃろ」

おじいさんはそう言って町を一つ指差した。

「でな、このあたりにルラムーン草というのが生えているらしいのじゃ」

おじいさんは村の西側を差してそう言った。

「……それだけで本当に呪文を覚えることが出来るんですか？」

「ああ！ 必ずじゃ！」

だからわしはお前らが取ってくるまで寝る！」

おじいさんはそう言うと、ベッドの方へ歩いていき、そして布団の中に入ってしまった。

……どうしようっ……

03（前書き）

テストが終わりそうなので、こっちも投稿してみました・・・

リュカの性格がおかしいかもしれませんが、
作者のリュカはこんな性格です！

・・・意見があれば言ってもらえると嬉しいです・・・

s i d eリユカ

僕は取り合えずおじさんの言うとおり、ルラムーン草という草を取りに行くことにした。

・・・馬車までの道のりはピエールが先導してくれた。

「ん？ ・・・ずいぶん遅かったな？」

スラおが睨むようにそう言ってきた。

「じ、情報とかを聞いたり、装備を整えたりしてたんだよ！」

僕はスラおに悟られないようにそう誤魔化した。

・・・これなら迷ったなんて思われない・・・

「・・・まさか迷っていただけ、とかは無いよな？」

ギクー！

「そ、そんなはずが有るわけがないだろ！」

まさか一瞬で見破られるなんて……
ど、どうしよう！ これ以上の誤魔化しは無理……

「……まあ、そんなことはどうでもいい……
何か情報は手に入れられたのか？ お前の欲しい情報とか」

「……それはなかったけど、呪文を教えてもらえることになっただよ！」

「呪文？」

「……街に住んでいるご老体が呪文の研究をしているらしく、それをアベル殿が手伝うことでその呪文を教えてくれるらしい」

スラおの疑問にピエールが答えた。

「……ピエールも少しだけスラおと仲良くしようとしてくれているんだね！」

「……ふん……それでその教えてもらえる呪文とはどんな呪文だ？」

「えっと、確か、知っている場所なら何処へでも行ける、古代の呪文だよ」

「……何処へでも飛べる古代の呪文ね……
それでその呪文を教えてもらう条件とはなんだ？」

「ここから西に生えているルーなんとか草っていう草を持っていくことだよ」

……草の名前は長すぎて忘れたけど、まあ、草の名前なんてどうでもいいよね！

「……じゃあこれからそのルーなんとか草って草を採りに行くのか？」

「うん！！」

……けど、呪文を覚えてくれるっていう人がなんか胡散臭いからもしかしたら

古代の呪文なんて嘘なのかしれないんだよね……

まあ、草を採ってきたら分かることか！

「……なら俺は先程のように馬車で待機しておくから。
まあ頑張れよ」

スラおはそう言うつと馬車の中へと入っていった。

それを見て、怒りの声を上げようとしていたピエールをなだめて、僕たちはおじいさんが地図で指した場所へ向かって歩き出した……

迫りくる魔物を倒しながら僕たちは西へと進んでいった。
道中に大きな滝があつて、

大きく遠回りすることになったが、
やっとおじいさんが地図で指した場所までたどり着くことが出来た。

「……やっと着いたよ……さて、おじいさんが言っていた草は……
ああ……！」

「……！ どうしたんですか！？ リュカ殿……！」

そう大声を上げながらピエールは僕に近づいてきた。
ボロンゴもホイミンも同じように僕の足元に来て、
心配そうな表情で僕を見つめてくれた。

でも、僕は今、大きな失敗をしたことに気が付き、
土下座するように地面にひれ伏していた。

「……おじいさんにどんな草が聞くのを忘れていた……」

「……あー!!」

僕の言葉にピエールは腑抜けたような声を出した。

「「「……」」」

辺りに気まずい空気が流れる。

僕やピエールは勿論、ボロンゴやホイミンも話せはしないが、
今、声を出しにくい空気になっていることは分かったようだ……

「……どうしたんだよ、大きな声なんかを上げて」

気まずい空気を知ってか知らずか、馬車の方からそんな声が聞こえてきた。

「……それがね、スーお。

呪文を覚えてくれるおじいさんにどんな草を採ってくるかを聞いていないんだ。

……聞いたのは草の名前だけさ……」

本気で失敗した。

まさかこんなことになるなんて……

「……それでどうするんだ？

一端その爺の所に帰るのか？

それか、この辺に生えている草を全部採るか？

……それとも呪文は諦めて、旅を再開するか？」

「……おじいさんの所に一端帰ることにするよ……」

……まあ、草のことを聞かなかった僕も悪いしね。

面倒だけど、一端おじいさんの所に帰るか……

「……お前の旅の目的は母を助けるため……魔王を倒すために
伝説の勇者を探すことだろうが。

こんな所で足止めを食らってもいいのか？」

……確かにこの場所に来るのに、歩き続けて2、3日くらいかっ
た。

往復したらそれなりに時間が掛かってしまっただろう……でも！

「……おじいさんと約束しちゃったしね。

今さらやめるなって出来ないよ……」

「リュカ殿……」

「……」

僕がそう言つと、ピエールは尊敬するような眼差しを僕に向けてきた。

……その眼はちょっとやめて欲しい……

スラおは僕をジッと見ていた。

僕もムツとスラおを見つめた。

そうするとスラおは大きなため息を付いた。

……失礼だな！

「……今回はお前の真つ直ぐな心に免じて、俺も手を貸してやろう……」 『ラナルータ！！』 「」

スラおが突然呪文を唱えた。

……ラナルータって？

「……ラナルータとは確か、一定の地域の昼と夜を一時的に反転させる呪文！

今使つて何の意味があるというのだ……

それにこの呪文は確か昔に失われた呪文！！

スライムが使える呪文ではないはずだ……」

……なるほど、そんな呪文なんだ。
でも、確かに今その呪文を使う意味が分からない……

「……ねえ。」

今その呪文を使ってどんな意味があるの？」

「……見ていればわかる……」

スラおはそう言って馬車の中へと戻っていった……
空はどんどん青から黒へと変わっていった……

そして空が黒に染まった瞬間、
足元に生えている草から薄い光が放たれ始めた。

「……これは！？……」

ピエールはそこまで言うのと黙り込んでしまった。

……無理もない。こんなものを見せられたら誰だって黙る。

「……きれいだ」

足元……辺りで薄く光っていた草から空に上がるように光の球が上
がっていた。

それはまるで他の世界のようにこの世のものとは思えないような光景だった。

その光はさらに光を放ったり、薄くなったりとを繰り返し、より一層、幻想的な景色へとなっていた。

その光はまるで小さな月のように、真っ暗な場所を光で輝かせていた。

「……その光を放っている草がルナムーン草だ」

馬車の中からポツンとそんな声が聞こえてきた。

「……さつさと採れよ。」

夜が明ければ、ただの草と、ルラムーン草の見分けがつかなくなる……」

スラおがそう言ってきたので僕は取りあえず、光を放つ草……ルナムーン草を採り、バックへと詰め込んだ。

そして僕とピエール、ボロンゴとホイミンはラナルータの効果が解けるまで、

その光景をジッと見つめていた……

03（後書き）

ラナルータの効果を変更しました。

さすがにいつでも昼夜変更するのはあまりにも現実的におかしいので……

だって、この呪文は確か、ドラキーでも使えるんだよ！？

そんな簡単に使えて、世界中の昼夜を変更するのは酷すぎます！

突然朝から夜に変えられるのは困ります！

……なので勝手に効果を変えさせてもらいました……

04（前書き）

久しぶりの更新です！

メインの小説も落ち着いてきたので、
これからはこっちの小説も出来るだけ更新したいと思います！

Sidereリユカ

僕達はラナルータの効果が切れると、

お爺さんにルー……薬渡すべく、これまでの道のりを戻っていた。
途中でモンスターにも何度も襲われたが、

スラおは一度も戦闘に参加することは無かった。

どうしよう！ またピエールがスラおに怒る……

そう思ってたゆつくりとピエールの顔をチラ見した。

……だけどそこにはいつもなら絶対に怒っている筈のピエールが
表情も変えずに剣を鞘に閉まっていた。

「……ねえ、ピエール。……スラおに怒ってないの？」

僕は不思議に思ってたピエールに尋ねた。

「……怒ってはいます……！」

……しかし、前ほどは怒ってはいないのかも知れませんか……」

「……どうして？」

「……彼が先程使った呪文……ラナルータの事は先程説明しましたね？
……あの呪文は失われし呪文……いえ、古の呪文いにしえです。」

……それをどうして彼が使えるかは分かりません」

……確かに昔に無くなった呪文をどうしてスラおが使えるんだろう

……

……呪文を使えたご先祖様の血を受け継いでいるのかな？

それともお爺さんと同じで、研究して覚えたのかな？

「……しかし古代の呪文と言ってもあの呪文は戦闘で使っても何の意味ありません。

……実は彼は本当に戦うのは苦手なんでは、と思い始めたのです」

「うーん……どうなのかな？

一様、ボロンゴの事を鍛えてくれてたらしいから、弱いわけではないと思うけど……」

実際ボロンゴの戦いからは昔に比べてすごく良くなってるからね！
距離の取り方とか、引くタイミングとか……

「……まあ、とりあえず、

それが分からない間は戦闘に関しては怒らないようにします……」

「……もし、強いつて分かったら？」

僕はニコリとほほ笑む。ピエールにそう聞いた。

……するとそれと同時に、

ピエールの後ろからおぞましい程の闇が出現した…ように見えた。

「その時はそれまでに我慢した分まで怒りますよ？」

先程と変わらずに微笑むピエールの眼に僕は顔を引きつりながらも笑うしかなかった……

……2日後、ルラフェンに戻った僕たち（スラおとパトリシアを除く）は

急いでお爺さんの家へと行った。

……ちなみに先頭はピエールだ。

前来た時と変わりなく煙を出すお爺さんの家の前まで来た僕たちは、扉を数回コンコンと叩いた。

…… だけど反応は無かった。

仕方なく僕は前と同じようにドアノブに手を掛けてそれを回した。
…… 開いた。

少し迷ったが、僕たちはそのまま扉を開けて中に入った。
一階にはお爺さんの姿が無かった。

階段を上がり、二階に上がってみると、
そこには前見た時と同じ場所で寝ていたお爺さんの姿があった。
…… まさか、4、5日間ずっとここで寝てたわけじゃないよね？

「…… お爺さん！！ 起きてください！！！！
ル…… 草を持ってきましたよ！！！！」

僕はお爺さんを揺すりながらそう言った。
するとお爺さんは突然起き上がった。

「なんと！！！！ ルラムーン草を持って来ただと！？」

「うん！ …… 採るのに苦労したけどね」

僕はそう言ってお爺さんにルラムーン草を手渡した。

「ほほう！ これがルラムーン草か！
あっぱれあっぱれ！！！！」

さっそく実験を開始するとしようぞ！！！！」

お爺さんはそう言うと、階段を駆け降りて行った。

……今、これがルラムーン草かつて言わなかった？

……もしかして実物を見たことがなかったとか無いよね？

僕がブツブツと呟いていると、ピエールがご老体を追いかけても良いんですか？

と言ってきたので、僕が取り敢えず、考えるのをやめて、お爺さんのいる一階へと降りて行った。

一階には大きなツボを見上げながら難しい顔で手元の本を読んでいるお爺さんの姿があった。

「……あの～おじいさ……」

「ええい！ 話しかけるでない！！！！」

……怒られた。

……これは僕が悪いのかな？ 仕方がない。少し向こうへ行ってお
うっ……

「よし、今じゃ!!!　ここでルラムー草を……」。

突然お爺さんが声を上げてきた。

……どうやらもうすぐ完成のようだ!

お爺さんはさっき僕が渡したルラムー草を巨大なツボの中に投げ込んだ。

ブクブクと音をたて始めた大きなツボから先程よりも毒々しい煙が舞い上がる!

それと同時にツボから光の粒のようなものが舞い落ち始めた。
その粒は時間とともに数を増やしていつて、
しまいにはこの部屋を完全に光で包み込んだ。
それと同時に僕は気を失った……。

「ふむ……。おかしいの……」

僕が目を覚まして初めに聞こえた声はお爺さんの声だった。
僕はゆっくりと腰を上げて立ち上がり、
周りで倒れているピーエルとボロンゴ、ホイミンを揺すって起こした。

「わしの考えでは今の出ルーラという古の呪文が
蘇るはずなんじゃが……」

……え！？　もしかして失敗したの！？
そんな！？　あんなに苦労して手に入れたルーラ…草だったのに！！！！

「のうお前さん。　呪文が使えるようになっていないか
ちと試してくれんかのう？」

「……試すってどんな風にですか？」

「なに、何時も呪文を唱える時と同じ感じじゃ！
今回はまだ呪文を見たことも使ったこともないと思うから、
心の中でルーラ！！！！と叫んでみるとよいじゃろう」

ふん。ルーラねえ……。

……と言つか僕何気に呪文の名前聞いたの今回が初めてじゃない！？
そうだよな？　絶対そうだよな！？

「何をしておる！」

呪文が使えるようになっておるいるか
早く試すんじゃ……！」

僕が心の中で訴えていると、お爺さんが急かすように言ってきた。
……まあ、とりあえずやってみよう！

「ええつと……『ルーラー！』」

そう呟いた瞬間、僕の体は浮かび上がった！

「おお……！ 成功じゃ……！」

凄い……！！

ルーラって空を飛ぶ呪文なんだ……！！
僕がそう歓喜しているにも関わらず、
体は上へ上へと上がって行く。

（……体が軽い！ こんな気持ちは初めてだ！ もう何も怖くない
……！！）

僕が心の底からそう思っていた。

……しかし体はすごい勢いで上へと飛んで行く。

ドオオオオオオン……！！……！！……！！……！！……！！

突如、何かと何かがぶつかったような音が部屋に響き渡った。
……僕が天井に頭を思いっきりぶつけた音だった。

「い、痛ったあああああ！！！！！！」

僕が痛みで床を転げまわった。

「すまんすまん！

この呪文……ルーラは一度行った場所に飛ぶことが出来る凄い呪文じゃー！

……だが、どうやら屋内では使えないようじゃな……」

転げまわる僕を憐れむような目で見つめながらお爺さんは言った。

……ここだけの話、僕、殺意を覚えちゃったよ……

……でもすごい呪文だ……！！

これで今まで行った場所に行く時、一瞬で行くことができる！

……もう屋内では絶対に使わないよ……

僕たちはお爺さんにお礼を言って、

スラお達が待っている、町の入口まで軽い足並みで歩いて行った。

……先頭はピエールだよ。

04（後書き）

……ネタはこの小説を書こうと思ったときに思いつきました。
……カットしよいかと思いましたが、折角なので載せました。

05（前書き）

……最近メインの小説のほうのスランプ気味です。

こっちは、

実況動画を見ながら書いているので、
詰まることはあまり無いので楽です。

……昔買った攻略本さえあれば、

実況動画で確認しなくても

話のながれがわかるのに……

S i d e リュカ

「……ってことがあって、僕はルーラを使えるようになったよ……！」

「……それはよかったな」

僕はスラおの所へ戻るとさつき、

お爺さんの家であつた出来事を一部隠しながら話した。

……僕敵にはもっとリアクションが欲しかったんだけど……

「……それでそのルーラって呪文を使つてみるのか？」

「うん……！ まだ、使つたことないから楽しみだよ……！」

そう。僕はまだルーラなんて使つたことは無い！

……無いんだ……

「リュカ殿……」

ピエールが何か悲しそうな瞳で僕を見つめた。

……やめて……！ そんな目で僕を見ないで……！！

「……それで記念すべき？ 第一回目の飛ぶ場所は決まってるのか？」

スラおが流れを変えるように話を戻した。

「……前から思ってたけどスラおって、かなり空気読めるよね？」

「うん！ 一回目はラインハットに飛ぶよ！！！」

何処にでも行けると聞いて僕が初めてに行きたいと思ったのはラインハットだ！

「……ラインハットねえ……」。

そこに何かあるのか？」

「うん。」

「……そこには僕の親友が居るんだ」

そう。親友が……。

「……ヘンリー殿ですね？」

ピエールが確認するように僕に言った。

僕はその言葉に何も言わず、ただ頷いた。

「……親友ねえ……」

俺にはよく分からない物だな……」

スラおは小さくそう呟いた。

……スラおには居なかったのかな？

「まあ、取りあえず唱えるよ……！」

僕、実は速く飛びたくてうずうずしてるんだ……！」

「そ、そうですね。」

よし、全員リユカ殿に集まれ！」

ピエールはそう言つて全員を僕の近くに集めた。

……あれ？　そういえばこの術、

数人で飛べるの？

……まあやってみたら分かるよね？

「よし行くぞ……！！　『ルーラ……！』」

ここに居る全員をラインハットに飛ばすイメージをして
呪文を唱えると、

想像通り、僕も含めた全員が光に包まれ、
そして空へ飛んだ！！！！

そして数秒もしないうちに大きな城下町がある城……ラインハット
にたどり着いた。

「す、凄い呪文ですね！！ さすがは古の呪文……」

ラインハットに付いたことに気が付いた。ピエールは驚くように言った。

……僕も驚いてるよ。

「……ここがラインハットねえ……。
聞いたほど悪い国じゃなさそうだな……」

スラおは何事も無かったかのようにいつも通りの調子で呟いていた。
……あんな凄いことがあったのに。
……って、聞いた話？

「スラおはこの国のことをどう聞いていたの？」

と言うより、誰から聞いたのかな？
……他のモンスター？

「俺が聞いた話では、国は荒れ果て、路頭者が多く、大人から子供までが物乞いを行いう国……。不安を漏らせば即刻太后に処刑される国だと聞いていた。……だが、ただの噂だったようだな……」

「……うん。」

それは本当のことだよ。

この国はつい最近までそんな国だったんだ」

スラおが噂だと勘違いしたのは仕方が無いね。今のラインハットは家や道がキチンと整備され、全員がきちんとした服を着ていて、なによりみんな笑顔で溢れていた。

僕もピエールも驚いたぐらいだよ！

「……それは興味深いな。」

どうやってそんな短期間で国を整えたんだ？」

スラおが興味を持つなんて珍しいな……

よし……！　なら僕達の活躍を話さなくちゃね……！！

「この国の太后は実は偽物で、本物は牢獄に閉じ込められていたんだ。」

それで僕とヘンリーは正体を暴くべく、

ラーの鏡を探しに神の塔っていう塔に上ったんだ！

あ、ちなみにヘンリーは実はこの国の王子で、

10年前に一緒にモンスターのさらわれ、奴隷にされてたんだよ。
それで……

「……もういい……。」

大体の事は分かった」

……ちえ、ここからが僕の活躍する話だったのに……

っていつか本当に分かったの？

「……今までの太后の行いを偽物が行ったと言い、国に発表したんだろ？

元凶が偽物で、その偽物が死んだと知れば、国を変えるなど楽だからな」

疑いの眼差しで見つめる僕に気が付いたのか、
淡々と言ってきた。

……本当にあれだけでそこまで分かるなんて……

「で、リュカ殿、これからヘンリー殿に直接会いに行くのですか？」

「勿論だよ！！！！ ピエールも来るよね？」

僕の言葉にピエールは少し困ったような顔をして頷いた。

…… モンスターだからとか気にしなくてもいいのに……

「……じゃあ俺はいつも通り馬車で待っている」

スラおはそう言って町の入口に向かおうとしていた。
……そうはさせない！

「ダメだよ！ 今回はスラおも一緒に来るんだよ？」

「……なぜだ？」

「それはスラおとピエールの仲が悪いからだよ！
だからこれからは仲良くなれる様に
スラおも一緒に行動してもらう！」

スラおとピエールの仲が悪いのは、お互いを知らないからだ。
だから一緒に町や村を回ったりすれば、少しは仲良くなれるはず……

「……別に俺はコイツと仲なんて悪くないぞ？」

スラおがそう言って文句を言ってきた。

「でも実際仲が悪いよ？」

まあ、大抵はピエールから怒りはじめるけど、
スラおの態度もよくない！

戦闘に参加しないのはいいけど、それ以外はキチンとしなきゃね
！」

スラおもむつとした表情で僕を見ていた。

ふふふ。さすがに戦闘に出ないことを言われたら、
言い返しにくいみたいだね！

「……わかったよ。一緒に行動すればいいんだろ？」

「そういう事！」

「……私は別に別々に行動してもいいかと……」

それぞれがそう言い、

1人と3匹……ああ、めんどくさい！

4人でラインハット城へ向かって歩いた。

ちなみにメンバーは僕、ピエール、ホイミン、スラおだ。

ボロンゴはさすがに大きいから、場所で待ってもらう事にした。

……ごめんね、ボロンゴ。

06（前書き）

……この回が書いていて一番苦労しました……

それとユニーク1000人突破です！！！！

私めの小説を読んでもいただき、有難うございます！！！！！！

S i d e リュカ

僕達はラインハット城へ行った。

……ヘンリーに会うために。

僕達が王座に行くとそこにはヘンリーの弟…デールと大臣が居た。

「どうも！ 久しぶり！！！」

「やや！ あなたはリュカさんじゃないですか！？」

「ちょっとヘンリーに会いたくなっただけ、

つい来ちゃったんだ！」

「そうなんですか。

あ！ それと兄からリュカさんの事をいろいろ聞きました」

「僕の事？」

「はい。それでリュカさんは伝説の勇者を探しているんですよね？
それでせめてもの恩返しにと

部下たちに伝説の勇者の事を調べさせていたのですが……

見つかりませんでした……すいません」

デールが暗い顔で謝ってきた。

……謝ることなんてないよ……！！

「いいよ！ 気にしないで……！！」

伝説の勇者がそんなに簡単に見つかるはずがないよ……！！」

「……そう言っただけだと助かります……。
でも、武具の情報は入手しました！」

「ホント！？」

「はい！ かつて勇者が使った盾がサラボナという町にあるそうです」

サラボナか……聞いたことがないな……。

……スラおなら知ってるかな？

「それでサラボナは西の国、ルラフェンの南にあると聞きました」

「ルラフェンの南！？」

「ルラフェンの事を知っているんですか？」

知ってるってもんじゃないよ……。
だって、さっきまでそこに居たんだから。

「……この事はさて置き、旅立つ前に兄に会ってやってください」

「勿論だよ!!!」

だってそのためにここに来たんだから!!!

「有難う御座います。兄の部屋はこの上です」

そう言うデールにお別れを言って僕達は上の階へと上がって行った。

……この先に悲劇が待っているとは知らずに……

ヘンリーの部屋？らしき前に兵士が立っていた。

僕達が近づいていくと兵士が言ってきた。……死の言葉を……

「やや!! ここはヘンリー様と奥様のお部屋。
無用なものは……」

やっぱりヘンリーの部屋だったね!

……うん?

今、奥様がどうか言ってなかった?

……言ってなかった?

言ってなかった!?

そんな事を考えている僕に兵士は驚いたような声を上げた。

「あつ、貴方様はっ!？」

さあどうかお通りください!!!」

兵士はそう言つて僕の背中を押す。

……ちよつと待つて!

なにか不吉な予感がする……

僕達が扉の先に行くと緑色のおかつぱ頭のような髪型をして、高そうな服を着た人…ヘンリーが驚いたような声を上げた。

「こいつはおどろいた!!! リュカじゃないか!？」

僕はヘンリーよりも右の方を見る。

……左側に見てはいけないようなものがあつた気がしたから……

「ずいぶんとお前の事を探したんだぜ!」

やめて!!! その先は聞いちゃいけない気がするんだ!!!

「うん。その……。
結……婚式に来てもらおうと思ってな」

ふ、ふん。そうなんだ。
デールくんがけっこんしたのかな？

そんな僕に対してヘンリーは止めの言葉を僕達に言ってきた。

「実は俺、結婚したんだよ……！」

「……ヘンリーがけっこん？」

ヘンリーがそう言うのと左の方からヒョコヒョコと
茶髪で髪の毛の長い女の人がこっちに歩いてきた。
……やっぱり彼女は……。

「リュカさま。お久しぶりでございます」

「……どうも。久しぶり……」

女の人……マリアさんは僕達に笑顔でそう言ってきた。
……今はその笑顔が痛いよ……。

「わははは！！！！と、まあそう言う訳なんだ！」

……クッソ！！！！ヘンリーめ、幸せそうに笑いやがって……！

「まあもしかするとマリアはお前の方を好きだったのかもしれないけど」

……マリアだってさ。……前までは、さん付けだったのに……。

「まあ貴方ったら……。

リユカ様には私などよりもっとふさわしい女性がきつと見つかりますわ」

……見つからなかったらずっと一人身か……。

……っていつか僕達の前でいちゃつかないでほしいんだけど……。

「と、とにかくリユカにあえて本当に良かった……！

結婚式には呼べなかったけど、

せめて記念品を持って行ってくれよ」

僕からあふれ出す負の感情に気が付いたのか、

ヘンリーは話題を変えるように言っていた。

……本当に昔から話すのは得意みたいだね……

まあ記念品を貰えるんだからそれで怒るのは無しにしてあげようか

な？

「昔の俺の部屋覚えてるだろ？
あそこの宝箱に入れてあるからな」

……つまり取りに行けっことか……。

……勿論相当なものだよね？

「ヘンリー殿とマリア殿、幸せそうでしたね」

前のヘンリーの部屋に向かう途中、
ピエールがそう言ってきた。

「……そうだね。まさに幸せすぎて死ぬって顔をしてたね……」

「……ならなぜお前はうれしそうな顔をしていないんだ？」

スラおが突然そう尋ねてきた。

……別にうれしくないわけじゃないんだけどね……

「うーん……まあ、うれしいけどムカつく！
そんな感じかな？」

「……どうしてムカつくんだ？ お前はあの女が好きだったのか？」

「別にマリアさんの事はそんな目で見てはなかったよ」

「……ならどうして？」

……そんなの決まってるじゃないか！！！！

「僕より先に結婚したのがムカつく！！！！」

「……ハア？」

スラおが呆れたような顔で僕の方を見た。

……全く、スラおは人間の男の気持ちを分かっていないな……。

07（前書き）

……なぜかこの話と前の話を書くのが今までで最も苦しかったです。

やっと次から話が進みます!!!

Sidereika

しばらく城の中を歩きまわると、昔のヘンリーの部屋の前にたどり着いた。

「おお！ 懐かしいな」

僕はヘンリーの部屋の扉を見ながらそう呟く。

「……どうやら現在は太后様が使用しているそうです……」

僕がまじまじと扉を見ている間に、ピエールが兵士に聞いたらしい。

「……太后さんが、ね……」

「……その太后って、ニセ太后に入れ替わってた奴のことか？」

「……そうだよ」

僕が短くそう答えるとスラおは何かを感じ取ったのか、それ以上は聞いて来なかった。

……恨んでるわけじゃ無いけど、あまり太后の事は話したくないんだ。

僕が元ヘンリーの部屋の扉を開けると、そこには想像通り、太后さんが居た。

「おお！ そなたは！ あの時は本当に世話になりもつした」

「……いえ、こちらこそご無沙汰しています」

僕が丁寧語で話すのを見てピエールが驚いていた。

……失礼だな……。

「……誤って住むことではないのですが……」

……ソナタの父親の件……本当に済まなかった……」

太后さんは頭を低く下げ、僕に謝ってきた。

……太后さんも昔のままじゃないってことだね。

「……謝らないでください。

……全く恨んでいないと言ったら嘘になりますが、僕はあなたのことを憎いとか、そんな感情は抱いていません……。今の貴方は国の為、国民のために頑張っています！それは国やデール王を見たら分かります。

……そんな貴方を恨んだりしたら、
天国の父が怒ってしまいますよ……」

僕は笑顔で太后さんにそう言った。

……太后さんの目から涙が出ているように見えた気がした。

「……言い訳になってしまいかもしれんが、
なぜあんなことをしたのか、
今となってはわからねにも分からね……」

……今の太后さんならもう大丈夫だね！

「太后さん！ これからもデール王とヘンリーにマリアさん……
それと国民を大切にしてくださいね！」

「……ああ！ 誓おう！
わらわは家族のため、国のため、……そして国民のために全てを
尽くすと！」

太后さんは真剣な表情でそう言ってくれた。
……もうこの国は大丈夫だよ。父さん……。

「それでヘンリーが昔使っていた宝箱ってこの奥にありますか？」

僕は本来の目的であるお祝い品が入っているとされている
宝箱の所在を尋ねた。

「ああ。それならこの奥の部屋じゃ」

「そうですか。分かりました！」

太后さんにそう返すと僕は更に奥の部屋へと足を運んだ。

「……わらわは少々散歩に出てくる。
その間にゆつくりしていくが良い」

太后さんはそう言っ部屋を出ていった。
……気を使わなくてもいいのに……。

奥の部屋の扉を開けると、
そこは十数年前と変わらない光景がそこにあった。

「……宝箱一個置いてあるだけにしては掃除されているな……」

スラおは部屋を見渡しながらそう言っ。
……よく気づくね。

そして僕達はヘンリーの宝箱の前に立つ。

……さて、どんな豪勢なものが入っているのかな！

僕は勢い良く宝箱を開ける！！！！

……しかし宝箱は空っぽだった。

……どういふこと？

「リュカ殿……これは一体……？」

ピエールがそう言っただけで声を上げる。

……フッフッフ……。

ヘンリーめ……そこまで僕を馬鹿にするか……。

今すぐヘンリーの所に行って顔面にバギをぶっ放してやろうかな。
それともヘンリーの顔面に全力パンチを100発……

「……おい！ 宝箱の底になにか文字が刻んであるぞ？」

僕がこれからヘンリーをどんな目に合わそうか考えていると、
スラをが宝箱に乗って言うてきた。

……そこに文字？ どれどれ……。

『リュカ。お前に直接話すのは照れくさいからここに書き残してお

く。

お前の親父さんのことは今でも一日だって忘れたことはない。
あの奴隷の日々に俺が生き残れたのはいつか

お前に借りを返さなくてはと……

そのために頑張れたからだと思っている。

伝説の勇者を探すというお前の目的は

俺の力など、とても役に立ちそうにないものだが……

この国を守り、人々を見守ってゆくことがやがて

お前の助けになるんじゃないかと思う。

リユカ、お前はいつまでも俺の子分……じゃなかった、

友達だぜ。 ヘンリー」

………僕は静かに宝箱を閉じた。

「………なんて書いてあったのですか？」

ピエールは宝箱のそこに書いてあった文字が気になって僕に尋ねてきた。

………この文字を読んだのは僕だけだ。

「………まあ、大したことは書かれたなかったよ」

「………そうなんですか？」

………この文は僕の心のなかにあればいい。

「さて！ 宝箱には何も入ってなかったてへんリーに文句を言いに行こう！……！」

「え？ 宝箱に結婚式の記念品なんて入ってなかったって？
わっはっは！」

お前は相変わらず騙されやすい奴だな」

「へんリーもいい加減そういうのやめたほうがいいよ！」

僕とへんリーはお互いにからかい、語り合う。

……次に会えるのはいつだか分からないから……。

「じゃあ今度こそ本当に渡すよ。
この記念オルゴールを」

へんリーはそう言うと綺麗に細工されたオルゴールを僕に渡してきた。

「……実はフタのところに宝石を埋め込むはずだったんだけど、職人が見つからなくて……」

「……職人ぐらい探しなよ……
大事な結婚式だったんでしょ？」

「それが国中の国民達が大騒ぎしてな。
結婚日を変えるわけにはいかなかったんだよ……」

僕とヘンリーは日が暮れるまでずっと話続け、
ヘンリーと別れた後はルーラでルラフェンに飛んで、宿で眠った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9575w/>

ドラゴンクエストV 天空のスライム？

2011年11月13日09時07分発行